

# Sino-Japanese Interactions Through Rare Books

古書から読み解く日本文化：中国文化の受容

Handout Japanese Version (日本語版)

## Week 1

EARLY HISTORY OF PRINTING AND BOOK CULTURE IN JAPAN

日本の出版文化前史

## Week 2

ANALECTS OF CONFUCIUS

論語

## Week 3

BOOKS IN CHINESE STUDIES - RECOMPOSITION AND CREATION BY ZEN TEMPLES

漢籍の受容 - 中世禅僧による再構築と創作活動

## Week 4

BOOKS IN CHINESE STUDIES - FROM MEDIEVAL TO EARLY MODERN JAPAN

漢籍の受容 - 中世から近世へ

## WEEK 4: BOOKS IN CHINESE STUDIES - FROM MEDIEVAL TO EARLY MODERN JAPAN



### Activity 1: 第4週へようこそ

日本の中世から近世に変わるころ、出版の世界ではどのような変化があったのでしょうか？

- 4.1 禅僧から漢学者へ VIDEO (02:27)



### Activity 2: 林家の人々—中世と近世をつなぐ—

最も影響力を持っていた学者一族の活動とその役割について理解しましょう。

- 4.2 林羅山の著作 ARTICLE

- 4.3 斯道文庫所蔵林羅山書簡 ARTICLE



### Activity 3: 『唐詩選』ブーム

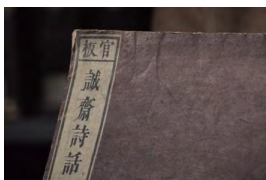
『唐詩選』を通して日本の学問の変遷を見ていきましょう。

- 4.4 朱子学から古文辞学へ VIDEO (03:31)

- 4.5 『唐詩選』とその注釈 ARTICLE

- 4.6 古文辞派の漢詩作品 ARTICLE

- 4.7 『唐詩選』のパロディ ARTICLE



### Activity 4: 昌平坂学問所の出版活動

日本の近世における漢籍の役割について理解しましょう。

- 4.8 朱子学の逆襲 VIDEO (02:10)

- 4.9 官版 ARTICLE

- 4.10 市河寛斎の『唐詩選』批判 ARTICLE



### Activity 5: コースのまとめ

近世日本における漢籍の受容についてまとめ、コースを通して学んできたことを振り返りましょう。

4.11	クイズ (第4週)	Quiz
4.12	近世の漢籍受容のまとめ	ARTICLE
4.13	書籍と文化の受容	DISCUSSION
4.14	感想をお聞かせください	ARTICLE
4.15	用語集 (第4週)	ARTICLE

## Week4: Activity 1

### 第4週へようこそ



日本の中世から近世に変わるころ、出版の世界ではどのような変化があったのでしょうか？

4.1 禅僧から漢学者へ VIDEO (02:27)

## Step 4.1 (Video)

### 禅僧から漢学者へ

第4週では、禅僧の学問を受け継ぎながら、新たな展開を示した、江戸時代の漢学の様子を見ていきます。

#### Keywords introduced in the video

- 漢学者
- 儒学者
- 林家

#### Historical Figures introduced in the video

- 豊臣秀吉(1537-1598), 関白
- 徳川家康(1543-1616), 徳川将軍家・初代将軍
- 林羅山 (はやし・らざん, 1583-1657)
- 藤原惺窩 (ふじわら・せいか, 1561-1619)

#### Video Script

##### 0:04

ここまで見てきたように、中世において漢籍の受容を担っていたのは禅僧でしたが、近世に入ると、幕府や藩に仕えたり、個人で塾を経営したりして儒学や漢詩文の研究や教育に携わる専門家が出現します。彼らを儒学者、あるいは漢学者と呼んでいます。

禅僧から漢学者へ、という担い手の変化は、政治や社会の変化と連動しています。室町幕府は五山と呼ばれる禅宗寺院を、学問のみならず、芸術文化全般にわたって中国文化の受容の本拠地として保護しました。禅僧はその知識をもって、外交や貿易にも活躍しています。

##### 0:55

この姿勢は、豊臣秀吉の政権にも引き継がれています。しかし、それを倒した徳川家康は、政治の本拠地を江戸に定め、禅僧ではない漢学の担い手として、林羅山 (はやし・らざん, 1583-1657) を身近に置きました。「林家」(りんけ)と中国風と呼ばれる彼の子孫が、このあとも幕府に仕えて、その主宰する学問所が漢学の本拠地になっていきます。Week 1のイントロダクションで京都五山のひとつ、建仁寺を紹介しました。Week 3でも建仁寺の僧侶が多数出てきました。五山の中でも、学問や文芸が盛んだった寺院として知られています。

##### 1:43

羅山は京都出身で、子どもの頃、この建仁寺において学問を学んでいました。しかし、そのまま禅僧になる道には進まず、寺を出て、個人の塾を開いて漢学を教えました。そのころ、既に同じような経歴を経ていた藤原惺窩 (ふじわら・せいか, 1561-1619) と出会い、その紹介で徳川家康に仕えることになったのです。

ここからは、羅山の生涯と著作、その子孫たちの活動を通じて、禅僧の学問を受け継ぎながら、新たな展開を示した、江戸時代前期の漢学の様子を見ていきます。

## Week4: Activity 2

### 林家の人々—中世と近世をつなぐ—



最も影響力を持っていた学者一族の活動とその役割について理解しましょう。

4.2 林羅山の著作      ARTICLE

4.3 斯道文庫所蔵林羅山書簡      ARTICLE

## Step 4.2 (Article)<sup>1\*</sup> 林羅山の著作

羅山の著作活動は多岐にわたっています。その特徴は、

- 勃興してきた商業出版と連携して、多くの著作を出版したこと。
- 自らの著作だけでなく、儒学の古典に漢文訓読のための符号（訓点）を付した、付訓本を多く出版したこと。これはWeek2で、論語について学んだことと思います。
- 著作は、純粋な漢学だけでなく、それを仮名交じり文でわかりやすく説いた啓蒙的なものも多く含んでいること。
- 日本の歴史や宗教に対する深い関心があり、その関係の著作も多いこと。

などが挙げられます。

いくつかの例を取り上げましょう。

慶應義塾所蔵以外で公開されている資料については、See Also 参照してください。

### 『歌行露雪』



Fig.1 『歌行露雪』慶長元年（1596）写（国立公文書館所蔵）, p29-p30

国立公文書館所蔵の自筆本です。白居易の長編詩「長恨歌」「琵琶行」の注釈を、学問の師のひとりである英甫永雄の講義を基にまとめたものです。まだ建仁寺で学問見習い中の14歳のときの著作で、上記画像 (fig.1) には、早熟の天才への称賛を惜しまない、英甫自筆の文章と詩が綴じ込まれています。全文は国立公文書館で公開中（See Also参照）

<sup>1\*</sup> 書籍情報と高品質画像は特設サイトをご覧ください。

[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.2](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.2)

## 『五山文編』



Fig.2 『五山文編』 元和3年（1617）写（国立公文書館所蔵）

これも国立公文書館所蔵の自筆本で、14世紀から16世紀にかけての五山僧の文章を自ら選んで集めたものです。五山の学芸を継承しつつ、それを乗り越えようとする意欲が感じられます。全文は国立公文書館で公開中（See Also参照）

## 『羅山林先生集』



Fig.3 『羅山林先生集』 寛文2年（1662）刊

生涯の漢詩文を分類集成した詩文集。詩集・文集それぞれ75巻という膨大なものです。

## 『童観抄』



Fig.4 『童観抄』17世紀前半刊

漢籍からことわざになるような有益な文章を抜粋して、その内容をわかりやすく解説したものです。

## 『古文真宝後集諺解大成』



Fig.5 『古文真宝後集諺解大成』

『古文真宝後集』の注釈書。「諺解」とは、漢文ではなく和文でわかりやすく解説している、という意味。弟子の鵜飼石斎（うかい・せきさい）がまとめたものです。

## 『本朝一人一首』

このほか、大名や旗本の系図をまとめた『寛永諸家系図伝』、後に息子の鷲峰によって『本朝通鑑』として完成する日本通史『本朝編年録』、各地の神社の由来を記した『本朝神社考』などがあります。

さらに、鷺峰には、日本の漢文学の歴史を辿り、漢詩作品を作者一人につき一首取り上げて論評した、寛文5年（1665）刊『本朝一人一首』（fig.6）という著作があります。



Fig.6 『本朝一人一首』寛文5年（1665）刊

ここで取り上げているのは主に平安時代の漢詩人で、五山僧は一人も出てきません。鷺峰は、自分たち林家と幕府との関係を、平安時代の学者貴族（博士家）と朝廷との関係のように考え、五山を飛び越えて、彼ら貴族の学者と自分たちを接続させようという意識がありました。羅山のなかにもあった、五山とのつながりを断ち切ろうという意識が、息子の鷺峰によって明確に示され、漢学者が禅宗寺院から完全に独立することになったのです。

## See Also

- 『歌行露雪』 慶長元年（1596）写  
<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F1000000000000034906&ID=&TYPE=&NO=>  
 国立公文書館・全文をPDF/JPEGで公開
- 『五山文編』 元和3年（1617）写 国立公文書館  
<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F1000000000000043961&ID=&TYPE=&NO=>  
 国立公文書館・全文をPDF/JPEGで公開
- 『羅山林先生集』 画像  
[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001966154](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001966154)  
 『羅山林先生集』詩集75巻文集75巻目録2巻/林羅山[著]；恕[林鷺峰][編] グーグルプロジェクト：第1-27冊、詩集部分のみ、末尾から撮影しているので注意
- 『童観抄』  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2599447>  
 国立国会図書館・全文をPDF/JPEGで公開
- 『古文真宝後集諺解大成』  
[http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=0253-008703](http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0253-008703)  
 国文学研究資料館（モノクロ画像）
- 『本朝一人一首』  
<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F1000000000000000000>

043900&ID=&TYPE=&NO=  
国立公文書館・本朝一人一首 1, 2, 3の画像を公開

## Step 4.3 (Article)

### 斯道文庫所蔵林羅山書簡

ここで、羅山の多方面への関心を示す興味深い資料を紹介します。

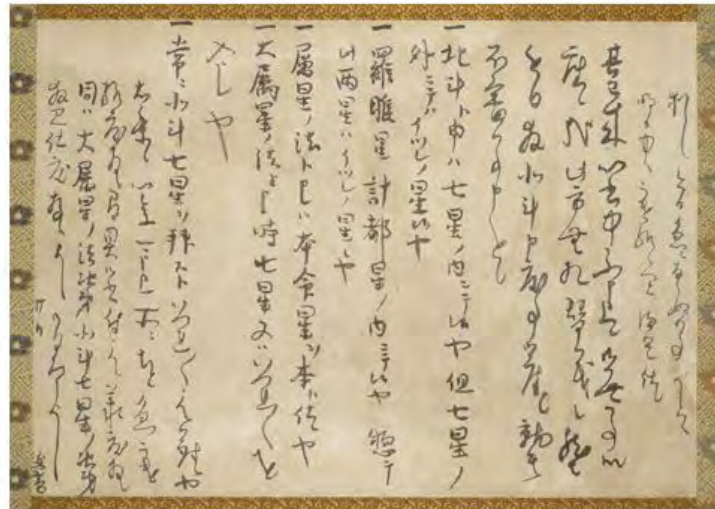


Fig.1 『羅山書簡』

[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.3](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.3)

## 原文

以下が、句読点・濁点を補い、一部表記を変更した原文です。

猶々今日急にならぬ御事に候はば、明日中にうけ給候へば、満足仕候。其已来、以書中不申上候。御無事御座候哉。此方無相替義候。然者、近日拜北斗申度事御座候。就其不審事申進候。

- 一 北斗ト申ハ、七星ノ内ニテ候ヤ。但、七星ノ外ニテハイヅレノ星候ヤ。
- 一 羅睺星・計都星ノ内ニテ候ヤ。惣テ此両星ハイヅレノ星候ヤ。
- 一 属星ノ法ト申候ハ、本命星ヲ本ト仕候ヤ。
- 一 大属星ノ法ト申候時、七星又ハ、いづれいづれを入申候ヤ。
- 一 常ニ北斗七星ヲ拜スト、いづれいづれニテ御座候ヤ。

右条々、以参可申上所に、ちと急にうけ給度存候間、目六御書付にて承度存候。同は、大属星ノ法次第、北斗七星ノ次第、拜見仕度存候。以上 恐惶謹言

廿日 道春

## 現代語訳

前回以来、御手紙をお出ししていませんでしたが、お元気でしょうか。私は変わりありません。さて、近々北斗七星法を行いたいと思っております。そこで、分からないことを申し上げます。

- 北斗というのは、北斗七星の一部なのか、それとも七星以外なのか。
- (北斗というのは) 羅睺星・計都星のどちらかなのか、そもそもこの二つはどこ星なのか。

- 「属星法」というのは、本命星をもととするのか。
- 「大属星法」というときは、北斗七星またはどの星を入れるのか。
- いつも北斗七星法を行うときは、どの星を指すのか。

これらのことを、直接参上してお聞きすべきところ、ちょっと急にお聞きしたくなったので、箇条書きを書き付けてお伺いしています。あわせて、「大属星法」「北斗七星法」のマニュアルも拝見したいと思います。

追伸 今日すぐにはできなければ、明日中にお聞きできれば満足です。

## 解説

宛先は不明ですが、質問の内容からして、真言宗または天台宗の僧侶で、このような修法に詳しい人なのでしょう。ずいぶんせつかに質問していますので、かなり普段から仲のよい間柄だと推測されます。

星への信仰は、古代から日本において盛んですが、僧侶でない羅山が自分で専門的な修法を行うというのは興味深いところで、彼の関心が、単なる漢学者のそれとは違い、仏教・神道も含んだ日本のさまざまな文化に及んでいたことを示すものと言えるでしょう。

## Week4: Activity 3 『唐詩選』ブーム



『唐詩選』を通して日本の学問の変遷を見ていきましょう。

- 4.4 朱子学から古文辞学へ VIDEO (03:31)
- 4.5 『唐詩選』とその注釈 ARTICLE
- 4.6 古文辞派の漢詩作品 ARTICLE
- 4.7 『唐詩選』のパロディ ARTICLE

## Step 4.4 (Video)

### 朱子学から古文辞学へ

17世紀末から18世紀になると、林家に代表される「朱子学」から「古文辞学」が主流となってきます。

そして、古文辞学で重んじられた秦および漢代の文章と盛唐（7世紀後半から8世紀前半）を中心とする唐詩をあつめた『唐詩選』という作品が出版され一大ブームとなります。

ここからは、その『唐詩選』について詳しく見ていきます。まずは、「古文辞学」とは何か？どのようにして登場してきたのかといった背景を、ビデオをご覧ください。

### ビデオで紹介した書籍

書籍情報と高品質画像は特設サイトをご覧ください。

[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.4](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.4)

- 『唐詩選』 嘉永7年（＝安政元年、1854）刊（個人蔵）

### 「朱子学」の基本概念

ビデオで紹介した、朱子学の基本概念を以下に記します。

- 理：個別の事物に存在する根本的な論理
- 氣：理によって統率されて、個別の事物を形作っている物質
- 性：人間のなかにある理
- 情：性が活動した状態

### ビデオで紹介して人物

- 伊藤 仁斎（いとう・じんさい、1627-1705）
- 荻生 徂徠（おぎゅう・そらい、1666-1728）

### Video Script

0:04

林家およびその周辺の漢学者は、朱子学と呼ばれる、中国宋代に発達した儒学を信奉していました。朱子学においては、理（個別の事物に存在する根本的な論理）、氣（理によって統率されて、個別の事物を形作っている物質）、性（人間のなかにある理）、情（性が活動した状態）というような抽象的な概念で、自然や社会そして人間を統一的に説明します。その根拠は儒学の根本経典である四書五経ですが、それらの書物にこのような理論がそのまま書かれているわけではなく、部分的な記述を総合し、場合によっては都合のいいようにつぎはぎして作り出したものです。

1:01

17世紀末から18世紀に入ると、このような理論は人間のあるがままの精神を阻害すると考える伊藤仁斎（いとう・じんさい、1627-1705）や、政治や社会を個人の倫理性とは切り離して考える荻生徂徠（おぎゅう・そらい、1666-1728）といった漢学者が出てきます。彼らは、朱子学批判の根拠として、四書五経の正しい解釈を求めました。彼らが考える、本来あるべき解釈とは、古代中国における言葉や事物をその時代に即して明らかにすることによって得られるものです。言葉の意味内容は時代と共に変化しますし、古典の解釈は、その時代時代の精神に影響を受けてさまざまです。

1:55

それをできる限り本来の意味に戻していこうとするためにはどうすればよいか。彼ら（特に荻生徂徠）は、幅広く古代の文献を研究するだけでなく、古代人が残した文学作品を模倣するというのを、その手がかりとしました。文学作品には、古代の人々の精神のさまざまな動きが反映しています。自分たちも、模倣を通じてそれを疑似体験することで、古代人の精神に近づこうとしたのです。このような文学観を持つ人々を「古

文辞派」と呼んでいて、もともとは16世紀の中国で流行したのですが、日本では18世紀の荻生徂徠とその弟子たちが代表的存在です。

2:46

中国の古文辞派が重んじたのは、「文は秦漢、詩は盛唐」、すなわち秦および漢代の文章と盛唐（7世紀後半から8世紀前半）を中心とする唐詩です。後者のアンソロジーとして作られたのが『唐詩選』でした。これが日本において出版されると一大ブームとなります。『三体詩』同様、日本独自の注釈書も生まれますし、パロディも作られます。ここでは、出版活動と密接に結びついたこれらの書物を見ていきます。

## Step 4.5 (Article)

### 『唐詩選』とその注釈<sup>2\*</sup>

日本における『唐詩選』は、もともと中国で注釈付きで出版されたものを、いったん本文のみにして出版され、その後日本人による注釈書がいろいろと作られていきます。

#### 中国で出版された『唐詩選』

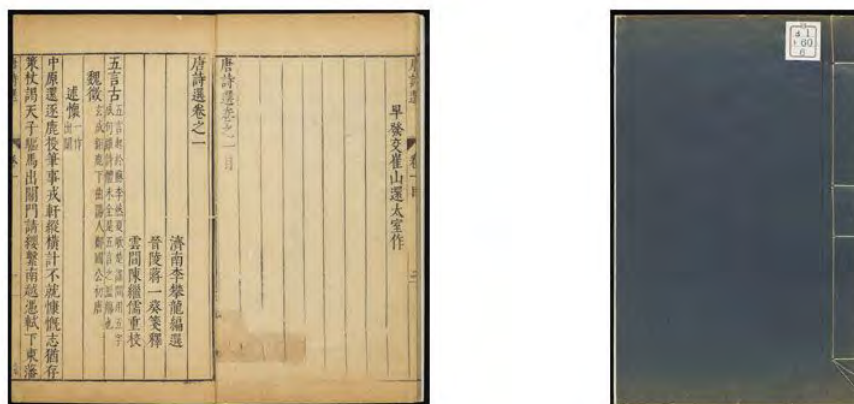


Fig.1 『唐詩選』明刊本（16-17世紀）

中国で出版された『唐詩選』の本来の姿。詳しい注釈を伴っています。

#### 和刻本の『唐詩選』



Fig.2 『唐詩訓解』17世紀前期刊  
全文はGoogle Book Project で公開 (See Also[1][2]参照)

内容はほとんど『唐詩選』と変わらないもので、注釈を伴って和刻本として出版され、17～18世紀にはある程度流布しました。

<sup>2\*</sup>書籍情報と高品質画像は特設サイトをご覧ください。

[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.5](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.5)

## 小さい版型の『唐詩選』

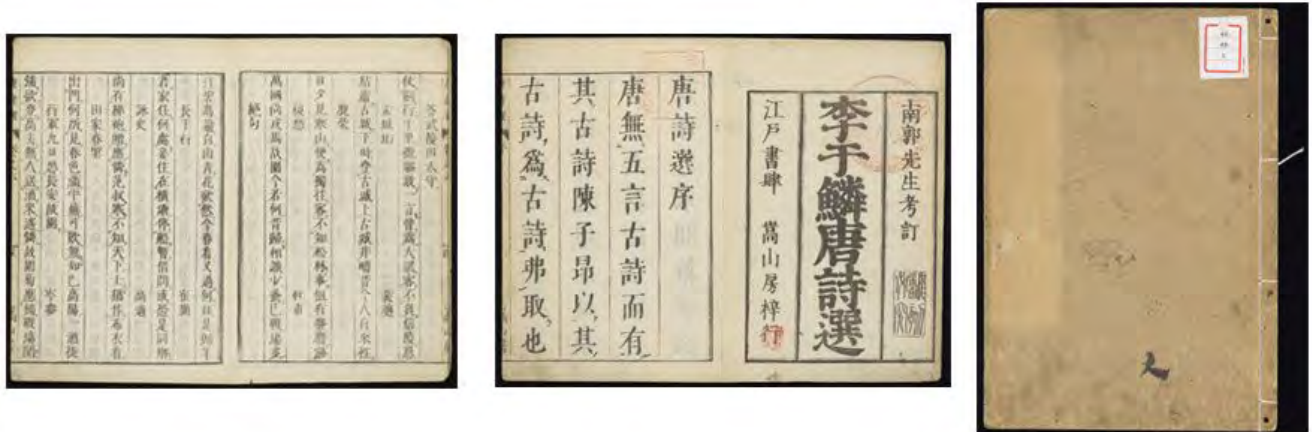


Fig.3 『唐詩選』寛政4年（1792）刊  
全文はGoogle Book Project で公開（See Also[3]参照）

荻生徂徠の弟子、服部南郭が校訂したもの。注を省いて本文のみにし、掌に収まるような小さな判型で刊行しました。初版は享保9年（1724）で、江戸の本屋小林新兵衛（こばやし・しんべえ）によって、江戸時代を通じて再版が繰り返されました。その他にも海賊版や地方出版など、およそ50種類以上の版本が確認されています。中国漢詩の本としては、江戸時代を通じて最大のベストセラーでしょう。

## 唐詩選の注釈書『唐詩選掌故』

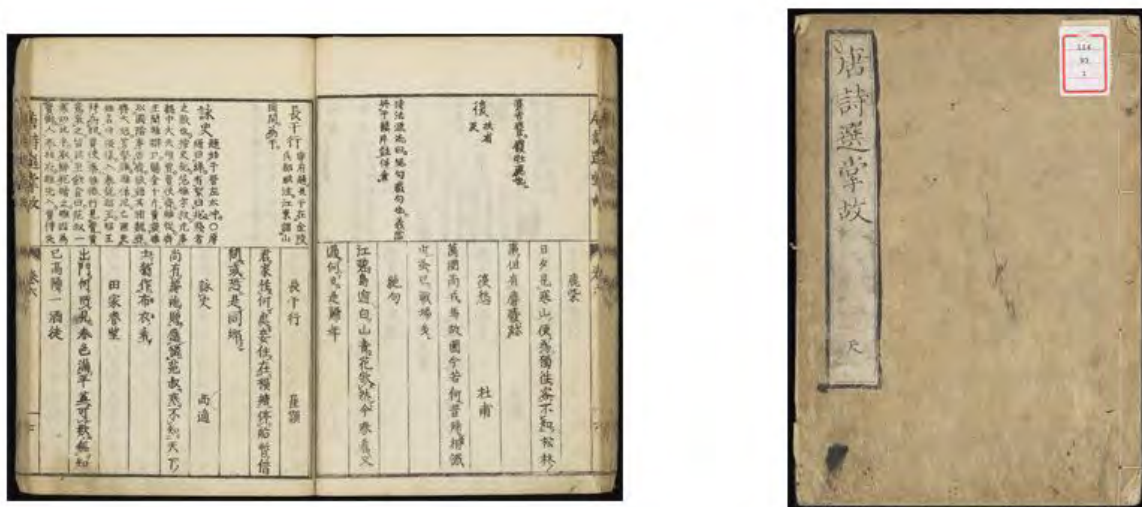


Fig.4 『唐詩選掌故』明和5年（1776）刊  
全文はGoogle Book Project で公開（See Also[4]参照）

『唐詩選』の版元、小林新兵衛から出版された注釈書。千葉芸閣（ちば・うんかく、1727-1792）という漢学者による注釈です。漢文の注が、本文の上部に配置されています。

## 『唐詩選国字解』



Fig.5 『唐詩選国字解』2点[左:天明2年刊本][右:寛政3年刊本]  
 出典：早稲田大学図書館古典籍総合データベース (See Also[5][6][7]参照)

服部南郭の注釈と称するものですが、実態は、彼の講義ノートをもとにして別人が加筆編集したものの（全く別人の作という説もある）で、誤りも多いようですが、わかりやすいのでよく読まれました。これも小林新兵衛から出ています。早稲田大学図書館蔵本はともに服部南郭の子孫が所蔵していたものです。

## 『唐詩選画本』

¥



Fig.6 『唐詩選画本』35巻 天明8年（1787）～天保7年（1836）刊  
 カラー画像は国文学研究資料館で公開 (See Also[8]参照)

『唐詩選』の詩一首ごとに、わかりやすい注釈とともに詩の情景を描いた絵を添えたもので、葛飾北斎も参加していることで知られています。

## 篆書体で印刷された唐詩選



Fig.7 『篆書唐詩選五言絶句』宝暦3年（1753）刊  
全文はGoogle Book Project で公開（See Also[9]参照）



Fig.8 『篆書唐詩選七言絶句』宝暦6年（1756）刊  
全文はGoogle Book Project で公開（See Also[10]参照）

詩を篆書体で印刷したもの。篆書は、印章の書体として江戸時代もよく用いられたので、さまざまな形態の字を学習するための教科書として作られたものでしょう。

### See Also

[1] 『唐詩訓解』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001967103](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001967103)

新刻李袁二先生精選唐詩訓解 .7巻首1巻 /明李攀龍選；明袁宏道校 慶應義塾図書館蔵（33@115@1）  
グーグルプロジェクト（末尾から撮影しているので注意）

[2] 『唐詩訓解』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001978481](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001978481)

新刻李袁二先生精選唐詩訓解 .7巻首1巻 /明李攀龍撰 ; 明袁宏道校 (京 : 田原勘兵衛) 慶應義塾図書館蔵 (151@6@1) グーグルプロジェクト

[3] 『唐詩選』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001967700](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001967700)

唐詩選 .7巻 /明李攀龍編選 ; 南郭[服部南郭]孝訂 江戸 : 嵩山房 小林新兵衛 , 寛政4(1792) グーグルプロジェクト : 末尾から撮影しているので注意

[4] 『唐詩選掌故』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001973231](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001973231)

グーグルプロジェクト : 末尾から撮影しているので注意

[5] 『唐詩選国字解』 天明2年刊本

[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17\\_02014/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_02014/index.html)

早稲田大学図書館古典籍総合データベース

[6] 『唐詩選国字解』 寛政3年刊本

[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17\\_02015/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i17/i17_02015/index.html)

早稲田大学図書館古典籍総合データベース

[7] 『唐詩選国字解』 日野龍夫校注

<https://www.amazon.co.jp/唐詩選国字解-東洋文庫-405-服部-南郭/dp/4582804055>

(参考) 日野龍夫校注 『唐詩選国字解』

全3冊 東洋文庫405407、東京 : 平凡社、1982 ISBN : 9784582804057

[8] 『唐詩選画本』

[http://base1.nijl.ac.jp/iview/FrameList.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=NA8-0409&PROC\\_TY](http://base1.nijl.ac.jp/iview/FrameList.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=NA8-0409&PROC_TYPE=ON&SHOMEI=唐詩選画本&REQUEST_MARK=ナ8-409-1~35&OWNER=国文研)

PE=ON&SHOMEI=唐詩選画本&REQUEST\_MARK=ナ8-409-1~35&OWNER=国文研

国文学研究資料館カラー画像

[9] 『篆書唐詩選五言絶句』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001978526](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001978526)

慶應義塾図書館蔵 (151/54/1) 宝暦3年 (1753) 刊

[10] 『篆書唐詩選七言絶句』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001979050](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001979050)

慶應義塾図書館蔵 (164/95/1) 宝暦6年 (1756) 刊 グーグルプロジェクト : 末尾から撮影しているので注意

## Step 4.6 (Article) 古文辞派の漢詩作品

古文辞派の漢詩とはどんなものなのか、服部南郭の有名な作品を読んでみましょう。

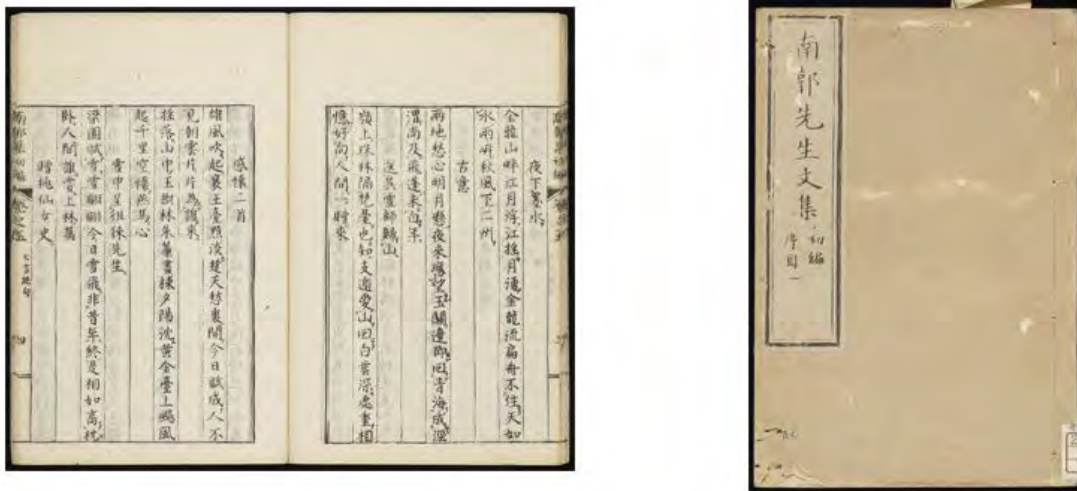


Fig.1 『南郭先生文集』享保12年（1727）刊行  
[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.6](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.6)

『南郭先生文集』初編～四編各10巻 (fig.1) は、享保12年（1727）に刊行された初編の巻5に収められた「夜下墨水（夜、墨水を下る）」です。墨水（ぼくすい）は、隅田川を中国風に呼んだもの。夜、舟に乗って隅田川を下流へと移動していくときの風景を詠んだ詩です。

### 原文

原文	読み下し文
金龍山畔江月浮	金龍山畔（きんりゅうさんぱん） 江月（こうげつ） 浮かぶ
江揺月湧金龍流	江 揺らぎ 月 湧きて 金龍 流る
扁舟不住天如水	扁舟（へんしゅう） 住（とど）まらず 天 水の如（ごと）し
兩岸秋風下二州	兩岸の秋風 二州（じしゅう）を下る

## 現代語訳

金龍山浅草寺の名を取って金龍山と称する待乳山（まつちやま）の横を流れる隅田川に月が映る。水面が揺れると月の光が湧き上がって、まるで金の龍が水の底から躍り出てきたかのようだ。私が乗った小舟は水の流れに乗って停滞することなく、はるか先方を見やれば、どこまでが空でどこまでが水面か、一つに溶け合って区別が付かなくなる。兩岸を吹き渡る秋風のなか、ここ武蔵と下総の国境を下っていく

## 解説

秋の美しい月光のもと、涼しい風に吹かれながら快適なクルーズを楽しむ様子が伝わってきます。

ここで注意したいのは、『唐詩選』に収める詩の表現を利用していることです。趙嘏「江樓書感」の「月光如水水連天」（月光水の如し水天に連なる）、李白「早発白帝城」の「兩岸猿声啼不住、輕舟已過万重山」（兩岸の猿声啼きて住まらざるに、輕舟已に過ぐ万重の山）あるいは「峨眉山歌」の「思君不見下渝州」（君を思えども見えず渝州を下る）、といった表現を巧みに組み合わせています。

唐の詩人たちが長江のような大河を舞台に、雄大なスケールで詠んだ詩を、身近な隅田川に置き換えて詠むことによって、時間と空間を飛び越えて、李白と南郭は一体化します。

詩という架空の文学世界のなかで、南郭は李白という配役を演じる俳優であり、その舞台は、18世紀、ようやく都市らしくなってきた江戸でした。このような、江戸の各地を舞台にして、それを中国の雄大な風景に擬えた詩を南郭は多く作っています。18世紀後半になると、経済も文化も成熟して、京都や大坂を上回る繁栄を見せ、「江戸っ子」の美意識も育ってきますが、その根源にこのような漢詩作品の流行があったと言えるでしょう。

## Step 4.7 (Article) 『唐詩選』のパロディ

こうして成熟した文化の中で、『唐詩選』そのものをパロディにした滑稽な詩（狂詩）が作られます。

### 『通詩選笑知』



Fig.1 『通詩選笑知』天明3年（1783）刊  
 ピンクの線の部分がこのステップで取り上げられている狂詩部分  
[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.7](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.7)  
 全文はGoogle Book Project 国文学研究資料館で公開 (See Also[1][2]参照)

本文の周囲に注釈を配置するのは、Step 3.19で見た『唐詩選掌故』の形式を真似ています。書名も「しょうこ」を「しょうち」と似せています。

### パロディ作品 『屁臭（へくさい）』

このなかから一首読んでみましょう。（仮名遣いは原文のままです）

原文	よみがな
一夕飲爛曝	(いつせきかんざましをのみ)
便為腹張客	(すなはちはらはりのきやくとなる)
不知透屁音	(すかしべのをとをしらず)
但有遺矢跡	(たどうんこのあとあり)

## もととなった作品 『鹿柴（ろくさい）』

もとの詩は、裴迪（はいてき・10世紀ごろの中国の武将）の「鹿柴（ろくさい）」です。王維（唐時代の詩人・官僚）の別荘である辋川荘の風景のひとつ「鹿柴」を詠んだものです。

原文	読み下し
日夕見寒山	日夕（につせき） 寒山（かんざん）を見ては
便為独往客	便（すなわ）ち独往（どくおう）の客（きゃく）と為（な）る
不知松林事	松林（しょうりん）の事を知らず
但有麋鹿跡	但（た）だ麋鹿（きんか）の跡有り *麋鹿は鹿のこと

## 解説

王維の「鹿柴」も『唐詩選』に収められ、ともに静謐な夕暮れの風景を詠んだ詩として知られます。その世界をスカトロロジーでひっくり返したものです。押韻の字「客」「跡」はそのまま使い、「かんざん」→「かんざまし」、「こと」→「おと」など、できるだけ近い音の言葉を使って、全く違う情景を詠んでいます。

作者は、ふだんから狂歌や狂詩を作っては批評し合う遊び仲間たちです。その中心にいた大田南畝（おおた・なんぼ、1749-1823）は古文辞派の漢詩人でもありました。身分はまちまちで、幕府に仕える武士だったり、大商人だったりするのですが、文学の世界では、ふだんの生活や身分を離れて、このような作品を作っています。これも演技の文学と言えるでしょう。

なお、本来なら注釈も合わせて読むと一層面白いのですが、それを理解するには、江戸時代の戯作や社会風俗に関する知識が必要です。詳しくは次の注釈書を参考にしてください。

中野三敏・日野龍夫・揖斐高校注『寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』（新日本古典文学大系84、東京：岩波書店、1993、ISBN：4002400840  
(Amazonで入手可能 - See Also[3]参照)

## See Also

### [1] 『通詩選笑知』

[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001971259](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001971259)

慶應義塾図書館所蔵・天明3年（1783）刊 グーグルプロジェクト・印面の端まで完全に画像に含まれていないので注意

### [2] 『通詩選笑知』 国文学研究資料館：モノクロ画像 天明3年（1783）刊

[http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=0324-008406](http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0324-008406)

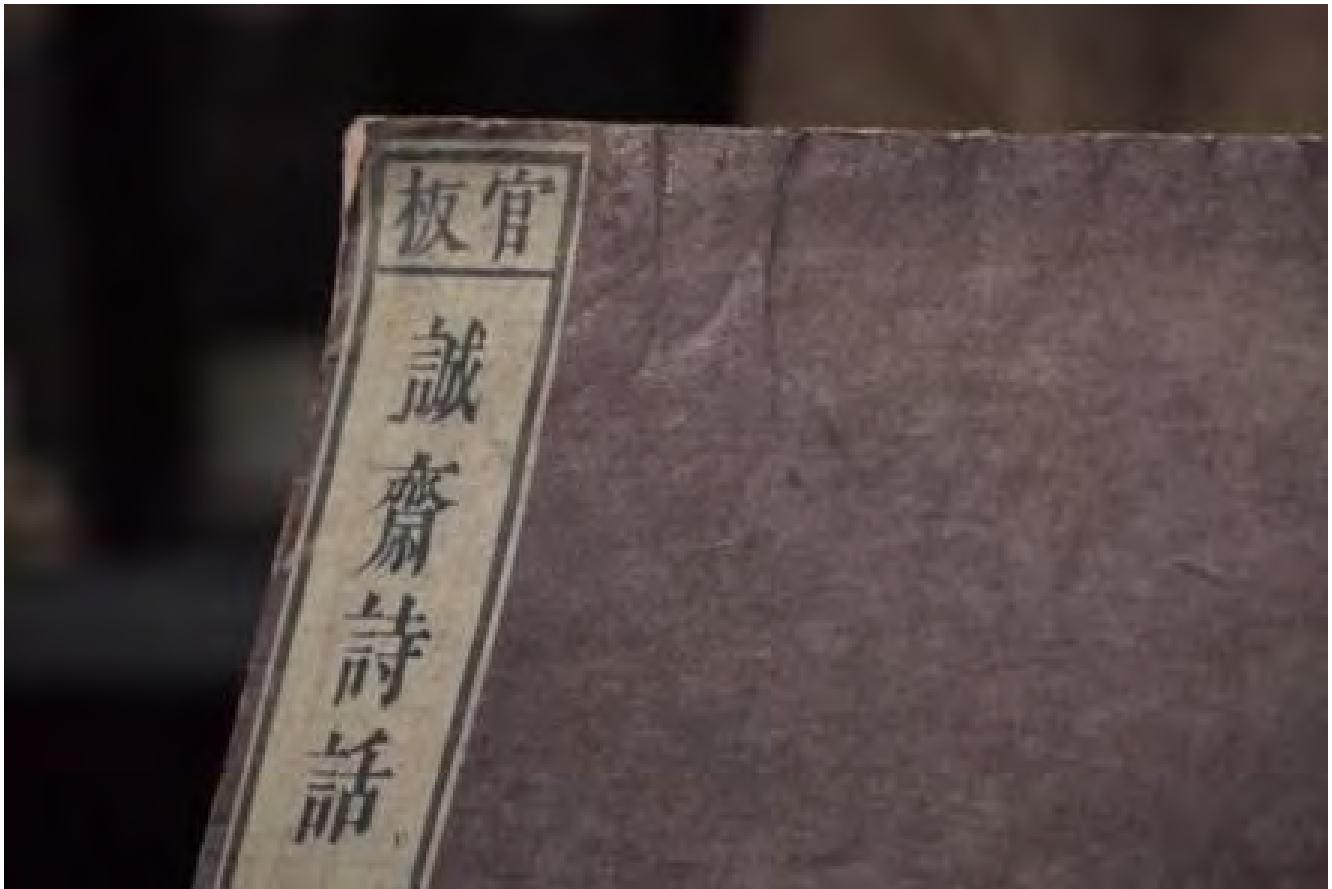
[3] 『寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』

<https://www.amazon.co.jp/寝惚先生文集・狂歌才蔵集・四方のあか-新-日本古典文学大系-中野-三敏/dp/4002400840>

中野三敏・日野龍夫・揖斐高校注『寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか』（新日本古典文学大系84、東京：岩波書店、1993、ISBN：4002400840

## Week4: Activity 4

### 昌平坂学問所の出版活動



日本の近世における漢籍の役割について理解しましょう。

- 4.8 朱子学の逆襲 VIDEO (02:10)
- 4.9 官版 ARTICLE
- 4.10 市河寛斎の『唐詩選』批判 ARTICLE

## Step 4.8 (Video)

### 朱子学の逆襲



ここまで見て来たように、学問の主流は朱子学から古文辞学に移って来ましたが、18世紀末に起こった政変と連動して、再び朱子学が学問の中心に躍り出ます。

ここからは、江戸後期、朱子学の中心として幕府の学問を推進した学校である「昌平坂学問所」の出版活動について見ていきます。まずは朱子学がどのようにその座を取り戻したのか、昌平坂学問所とは何か、ビデオで堀川教授の解説をご覧ください。

### ビデオで紹介した書籍

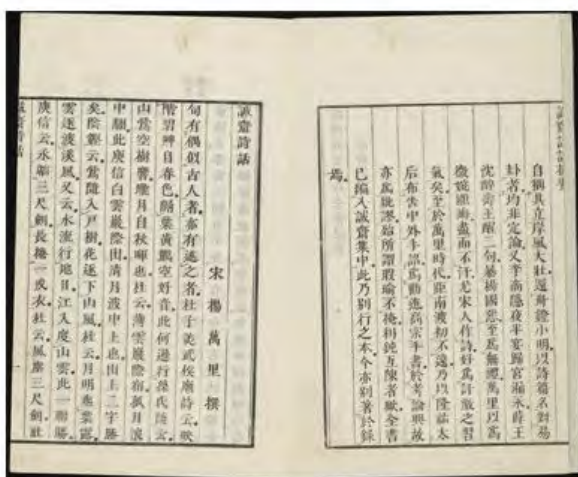


Fig.1 『誠齋詩話』享和2年（1802）刊  
[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.8](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.8)  
全文は国立国会図書館デジタルコレクションで公開（See Also参照）

## ビデオで解説したキーワード

- 古文辞学
- 朱子学
- 寛政の改革(1787)
- 寛政 ((1790)
- 昌平坂学問所
- 藩・藩校
- 官版（かんぱん）
- 寛政異学の禁

## ビデオで紹介した人物

- 松平定信 (1758-1829)

## Video Script

0:04

古文辞学は、学問・文学両面において、江戸時代の漢学を大きく変え、漢文以外の文学にも影響を与えました。しかし、学問に倫理性を求める朱子学的な考え方は根強く存在し、その信奉者たちが政権交代と連動して、幕府の学問の中心に躍り出ます。松平定信（まつだいら・さだのぶ、1758-1829）によって天明7年（1787）に始まった寛政の改革は、幕府財政の立て直し、綱紀肅正などを行いつつ、飢饉対策やロシアの南下政策への対応など、内政外交において成果を挙げました。

0:57

このなかで、学問的に低調だった林家に、優れた人材を養子として送り込み、私塾だった学問所を幕府の学校として位置づけました。昌平坂学問所（昌平黉ともいう）です。ここでは、朱子学以外の学問を禁止しました。これを「寛政異学の禁」と呼んでいます。これは、一面では学問の自由を損なう措置と言えますが、幕府が積極的に学問の奨励に踏み出したことによって、その刺激を受けて、全国各地に藩校が設立されました。

また、学問所に、幕臣の子弟だけでなく、地方の藩の若者を学生として受け入れたことによって、彼らが地元に戻って弟子を育て、またその弟子が学問所で学ぶ、というような、学問所を中心としてネットワークが形成されることとなります。

1:45

学問、特に朱子学の奨励という観点から、幕府は出版活動にも乗り出します。これが、ここでのテーマ、官版（かんぱん）と呼ばれる昌平坂学問所による出版です。

## Step 4.9 (Article)

### 官版

昌平坂学問所は、寛政11年（1799）から慶応3年（1867）までの約70年間に、210点あまりの漢籍を出版しました。これらを官版（かんぱん）と呼びます。

官版とは「政府の出版」という意味ですから、幕府の他の機関や、明治維新後の政府の出版物にも使われるのですが、出版史・学問史の専門用語としては、昌平坂学問所による出版物のみを指すのが普通です。

すでに述べたように、寛政異学の禁と連動して、朱子学奨励を目的として始まったものであり、朱子学関係の著作が多く含まれるのは当然ですが、それ以外にも文学関係の著作の出版も60点以上あります。

### 『誠齋詩話』（せいさいしわ）

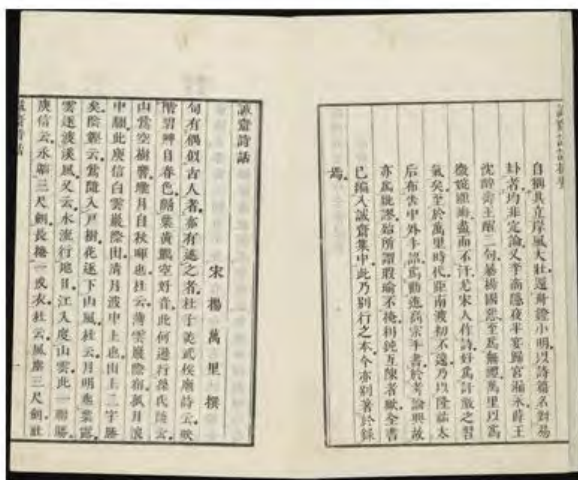


Fig.1 『誠齋詩話』享和2年（1802）刊

[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.9](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.9)  
全文は国立国会図書館デジタルコレクションで公開（See Also参照）

これは明治42年（1908）に残存していた版本を用いて印刷した「昌平叢書」のなかの一冊です。

南宋の詩人楊万里が著した漢詩についての随筆のようなもので、単行本としては中国でも日本でも刊行されず、『四庫全書』に初めて収録されたものです。したがって、この本も『四庫全書』に基づいています。

『四庫全書』は清の乾隆帝が全国各地に伝わる漢籍を集めさせ、学者を動員してその解題を作らせた上で、書写、保存した中国の書物史上画期的な叢書です。このうち、それまで刊行されることがない書物を選んで転写した『四庫全書無版本』という叢書が、長崎を通じて日本に輸入されました。大変貴重な書物で、日本全国で3点しか確認されていません。その一つが昌平坂学問所があり、現在国立公文書館に所蔵されています。

そうすると、この本はそれを用いたと考えられるのですが、不思議なことにその写本は、文化4年（1807）に蔵書として登録されたものです。つまり、本書刊行以後ということになります。別の写本を用いたのか、あるいはだれか昌平坂学問所関係者の個人蔵書であったものを官版刊行の底本として用いた後に学問所蔵書としたのか、今後の検討課題です。

冒頭には、中国の学者が記した解題（「提要」）が載っています。

ほんの一例をお示しただけですが、このように、官版の出版については、中国の最新の学問状況に対して敏感に反応している様子が見て取れます。また、楊万里は、他の南宋の詩人たちとともに、当時の漢詩人たちが大変好んだ詩人でした。そのような日本国内の文学思潮にも対応した書目選定です。

## See Also

『誠齋詩話』 せいさいしわ <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/899018> 『誠齋詩話』 享和2年（1802）刊・国立国会図書館デジタルコレクション（モノクロ画像）

## Step 4.10 (Article)

### 市河寛齋の『唐詩選』批判<sup>3\*</sup>

政治的に、また学問的に、古文辞派から朱子学へという転換がなされた18世紀末は、文学の世界においても、盛唐詩を信奉する古文辞派の詩風から、南宋詩の写実性や詩人の個性を重んじる詩風へと、転換が起きていました。

江戸においてこの転換を推進したのが、昌平坂学問所の教官を辞めて在野の学者として活躍し始めた市河寛齋（いちかわ・かんさい、1749-1820）です。彼は江湖詩社という結社を作り、菊池五山（きくち・ござん）、柏木如亭（かしわざい・じょてい）、大窪詩仏（おおくぼ・しぶつ）といった優れた詩人・批評家を育て、この風潮を確かなものにしました。

寛齋の著作に『唐詩選』およびそれを尊重する古文辞派を批判した著作『談唐詩選』があります（fig.1）。

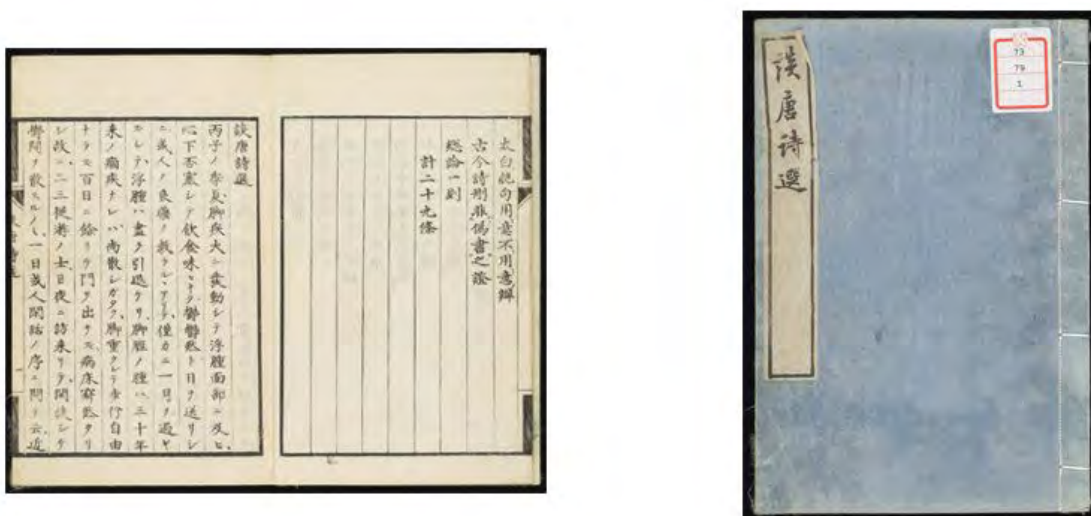


Fig.1 『談唐詩選』文化8年（1811）刊  
全文はグーグルプロジェクトで公開（See Also[1]参照）

ここで彼は、『四庫全書総目提要』を引用しつつ、『唐詩選』が出版業者が勝手に作った偽書であると主張します。そして、そのようないい加減な本に基づいて校訂出版した服部南郭（1683 - 1759）を批判しています。その内容は、収録された唐詩の本文に誤りが多い、ということです。

単に文学観の違いだけでなく、清代の学問の成果に基づき、明代の出版物を批判することによって、それを信奉する古文辞派を批判する、という論法です。

<sup>3\*</sup>書籍情報と高品質画像は特設サイトをご覧ください。  
[https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl\\_img/course03/week4\\_all.html#4.10](https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course03/week4_all.html#4.10)

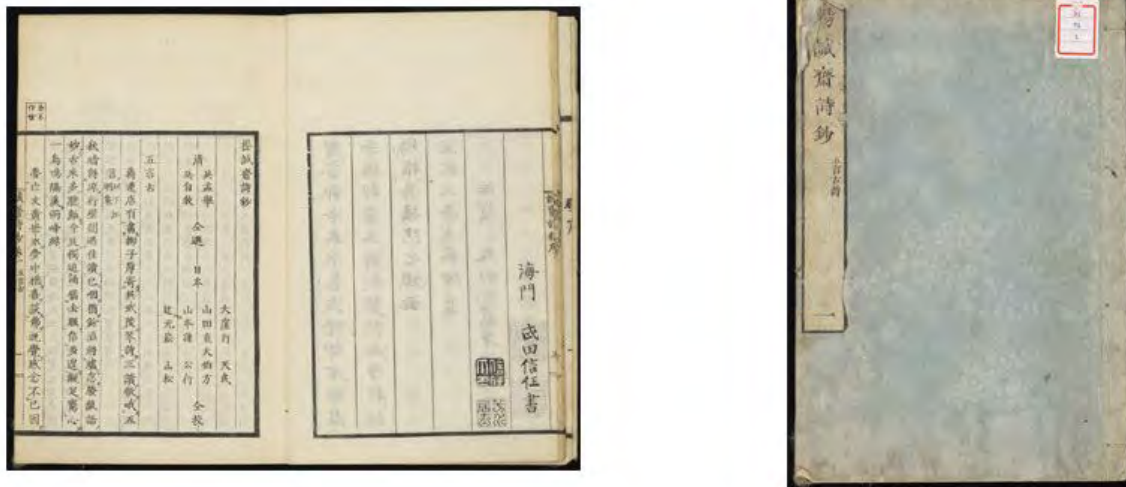


Fig.2 『楊誠齋詩鈔』文化5年（1808）刊  
全文はグーグルプロジェクトで公開（See Also[2]参照）

『楊誠齋詩鈔』（Fig.2）は、寛齋の弟子である大窪詩仏らが校訂した、南宋の詩人楊万里の詩集ですが、もともと清の呉孟挙・呉自牧編で、『宋詩鈔』という大部の書物から楊万里の部分のみを抜き出したものです。

このように、江湖詩社は、同時代の中国における学問や出版の動向をキャッチして、それを利用しながら日本国内での文学活動を行っていました。その方法は、昌平坂学問所の学者たちと共通していました。

## See Also

[1] 『談唐詩選』文化8年（1811）刊  
[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001969473](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001969473)  
慶應義塾図書館蔵（73/79/1）グーグルプロジェクト

[2] 『楊誠齋詩鈔』5巻（図書館31/71/5）文化5年（1808）刊  
[http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp\\_menu2.php?d=001966767](http://kosmos-ext.lib.keio.ac.jp/V3/glp_menu2.php?d=001966767)  
慶應義塾図書館蔵（31/71/5）グーグルプロジェクト

## Week 4: Activity 5

### コースのまとめ



近世日本における漢籍の受容についてまとめ、コースを通して学んできたことを振り返りましょう。

- |      |             |            |
|------|-------------|------------|
| 4.11 | クイズ（第4週）    | QUIZ       |
| 4.12 | 近世の漢籍受容のまとめ | ARTICLE    |
| 4.13 | 書籍と文化の受容    | DISCUSSION |
| 4.14 | 感想をお聞かせください | ARTICLE    |
| 4.15 | 用語集（第4週）    | ARTICLE    |

## Step 4.11 (Quiz)

### Quiz (Week 4)

Week 4では、日本の中世から近世に至るあいだの「漢籍の受容」の変化（担い手の変化や政治、社会の変化）について、学んできました。本Stepでは、Week 4で学んだ歴史や人物について、選択型クイズを通じて復習してみましよう。

#### Question 1 「林家（林羅山）」に関する質問

禅僧ではない漢学の担い手として活躍した林羅山（1583-1657）。以下の文章のうち、林羅山に関する説明としてふさわしくないものを1つ選びなさい。

##### 多肢選択式（4択）

1. 林羅山と彼の子孫は「林家（りんけ・はやしけ）」と呼ばれ、幕府に仕え、やがてはその主宰する学問所が漢学の本拠地になっていきます。
2. 林羅山は自らの著作だけでなく、儒学の古典に漢文訓読のための符号（訓点）を付した、付訓本を多く出版しました。また、著作は純粋な漢学だけでなく、それを仮名交じり文でわかりやすく説いた啓蒙的なものも多く含んでいました。
3. 林羅山と（息子の）鷲峰をはじめとする彼の子孫は、五山の学芸を継承することに重きを置き、五山とのつながりを大切に、常に従来の漢学・禅宗寺院の教えを守っていきました。
4. 林羅山の関心は、単なる漢学者のそれとは違い、仏教・神道も含んだ日本のさまざまな文化に及んでいた。

#### Question 2 「唐詩選」に関する質問

盛唐（7世紀後半から8世紀前半）を中心とする唐詩をあつめた「唐詩選」。その唐詩選についての説明としてふさわしくないものを1つ選びなさい。

##### 多肢選択式（4択）

1. 17世紀末から18世紀になると、日本の学問は「朱子学」から「古文辞学」が主流となっていきます。荻生徂徠をはじめとする「古文辞派」の漢学者は、『唐詩選』など、古代人が残した文学作品を模倣し、また模倣を通じてそれを疑似体験することで、古代人の精神に近づこうとしました。
2. もともと中国で出版された『唐詩選』は、日本で出版されると一大ブームとなります。また、日本ではじめて出版された時（初版）から、詳しい注釈を伴って出版されました。
3. 荻生徂徠の弟子、服部南郭は「古文辞派」の漢学者として活躍し、『唐詩選』の注釈書等、様々な著作を残しました。
4. 江湖詩社の創立者としても知られる市河寛斎（1749-1820）は、『唐詩選』およびそれを尊重する古文辞派を批判しました。明代の出版物を批判することによって、それを信奉する古文辞派を批判する、という論法です。

### Question 3 「朱子学・古文辞学」に関する質問

古文辞学と朱子学は、それぞれ江戸時代の学問・文学のあり方を大きく変えました。その古文辞学・朱子学に関する説明として正しく記述されているものを1つ選びなさい。

#### 多肢選択式（4択）

1. 寛政異学の禁（1790）では、古文辞学以外の学問を禁止しました。
2. 林羅山によって始まった寛政の改革（1787）は、幕府財政の立て直し、綱紀粛正などを行い、成果を挙げました。
3. 荻生徂徠が立ち上げた私塾は、やがて私塾だった学問所を幕府の学校として位置づけ、幕府直轄の昌平坂学問所として知られるようになりました。
4. 江戸幕府は昌平坂学問所に対し、朱子学以外を異学とし、朱子学以外の学問を禁止しました。この改革は「寛政異学の禁（1790）」として広く知られています。

### Question 4 「官版」に関する質問

朱子学奨励を目的として始まった「官版」。その官版に関わる出来事に関する説明として正しく記述されているものを1つ選びなさい。

#### 多肢選択式（4択）

1. 昌平坂学問所は、合計10点あまりの漢籍を出版し、これらは官版（政府の出版）と呼ばれています。
2. 官版とは「政府の出版」という意味を持つことから、幕府の他の機関や、明治維新後の政府の出版物のことも指します。
3. 南宋の詩人楊万里が著した漢詩についての随筆『誠齋詩話』は、単行本として、中国でも日本でも刊行されました。
4. 中国では、『四庫全書』を編纂するため、全国各地に伝わる膨大な量の漢籍が集めさせられ、また学者を動員してその解題を作らせた上で、書写、保存しました。

## Step 4.12 (Article) Summary of Week 4

ここまで、日本における近世（およそ16世紀後半～19世紀前半）の漢籍受容について駆け足で見してきました。

中世と大きく異なる点は、日本に商業的な出版活動が定着し、漢学者の活動も、それと密接不可分なものになったということです。自分たちが学習・研究のために読む本も刊本が大部分を占めるようになり、またその成果を世に問う著作や注釈書についても、多くの学者は出版を前提にしています。

Step 4.4～4.7 では、古文辞派の文学の特徴を「演技の文学」ということばで表しました。しかし、日本文学全体を見渡してみると、作者が別の人格を装って作品を作ることが和歌の世界にもありますし、近世文学の主流であった俳諧も、本名とは異なる名（俳号）で作者を表示します。このような伝統があったからこそ、古文辞派の文学は広く流行したのかもしれませんが。

Step 4.8～4.10 では、江湖詩社の活動までを述べましたが、幕末から明治にかけて、日本の漢詩はさらに発展していきます。また、漢籍受容についても、明治10年代以降清国との国交が結ばれたことで、人的交流が盛んになり、新たな展開を迎えます。このコースではそこまで述べることは出来ませんでした。

## Step 4.13 (Discussion)

### 書籍と文化の需要

受講者の皆さんには、以上の点を踏まえて、また、コース全体を振り返って、次のようなテーマで自由に討論をして頂ければと思います。

#### 出版の歴史に興味がある方に

(1) 日本における漢籍受容のなかで、版本はどのような役割を果たしたのでしょうか？

#### 朝鮮半島の文化や歴史についての知識がある方に

(2) 日本と同じく、あるいはそれ以上に中国文化の影響を強く受けている朝鮮半島における漢籍受容を日本と比較するとどうでしょうか？

#### ご自身の国や地域の歴史について知識がある方に

(3) あなたの国・地域は、他の国・地域の文化に強い影響をうけた歴史がありましたか？その時、書籍が果たした役割について、具体的な例をあげてご説明ください。

#### 日本文学に興味がある方に

(4) Week 3・Week 4 で触れた文学作品や注釈の特徴は、他の日本文学の作品や注釈と共通性があるだろうか？

#### ご自身の国や地域の文学に興味がある方に

(5) このコースで紹介した作品（詩、詩選・注釈等）は、あなたの国や地域の文学と、何か共通点がありますか？

#### 日本の近代化に興味がある方に

(6) 明治以降、西洋文化の影響が強くなるなかで、漢籍受容のあり方はどう変わっていったらうか？

#### あなたの国や地域の近代化に興味がある方に

(7) あなたの国や地域の近代化に強く影響を及ぼした、他の国・地域はありますか？また、その過程において、書籍はどのような役割をはたしていたのでしょうか？

## Step 4.14 (Article)

### 感想をお聞かせください

コースを最後までおつきあいいただきありがとうございました。コース全体をとおして、もっとも興味深いと思われた点を教えてください。また、今回とりあげた、漢籍の受容と似たような例、あるいは、受容の様子が異なる例がありましたら、紹介してください

他の学習者のコメントを読み、フィードバックをお願いします。'like' をつけるのも忘れずに。

4週間ありがとうございました。慶應義塾大学の他のコースでまたお目にかけるのを楽しみにしています。

### 慶應義塾大学の関連コース

今回のコースの中でもご紹介しましたが、「Japanese Culture Through Rare Books（古書で読み解く日本の文化）」が登録開始となっております。和本の装訂やその生い立ちなどを、実際の書物を見ながら学んでいきます。ぜひご参加ください!

<https://www.futurelearn.com/courses/japanese-rare-books-culture/>

### 受講後調査にご協力ください

今後のコース改善のために、受講後調査にご協力いただければ幸いです。

### コースのアップグレードについて

コースをアップグレードすると、以下の権利が得られます。

コースへの無期限アクセス: FutureLearnがあるかぎり、今後いつでも自分のペースで学習していくことができます。

参加証あるいは修了証の取得: 条件を満たした場合に、参加証あるいは修了証を取得できます。

詳しくは以下をご覧ください。

<https://www.futurelearn.com/courses/japanese-rare-books-culture/3/upgrade>